大会 報告

増した院政期、年劣制の秩序は崩壊へと向かい、人格的関係と個
別具体的な奉仕が重視される昇進原理が、中世叙位制度の基本的
性格として後白河院政期に確立した。かかる昇進原理が諸大夫層
にまで浸透した鎌倉期に、超越の急増と被超越者による寵居等
の問題が深刻化し、叙位除目従政の実施が求められた。年爵運用
の制限と勤効の低減、『臨時』なる叙位事由への統一により、叙
任権を治天の君に収斂し、事後対応策として同位記・位等で
による超越抑制が図られたものの、分家の中を進行が加速し貴族間抗争
が激化すると対策に、天皇家の分裂による賜恩行為（叙任）
の増加相俟って、超越問題は一層深刻化した。そして、臨時叙
位と宣下のみの叙任が増加し、口宣案成立に繋がったと指摘した。

退耕行勇と鎌倉幕府

中村

西行流と幕府との関係は西行の性格から適的に論じられたが
ちが、門流の発展期にあたる一二〇年代後半以降の活動を支
えたのは退耕行勇である。西行・行勇が幕府に重用された背景に
は、政子・源実朝の帰依と鎌倉における顧密ゲン不足があった。行
勇が入府として源朝から重用されたというの説あり。それゆえ政
子・実朝の死没と源家将軍就任に伴う顕密高爵の鎌倉下向は行勇
らに対する幕府保護の希薄化をもたらし、以降、行勇は政子・実
朝から与えられた活動基盤（建仁寺、金剛三門院など）の門流相承
近年大きく進展した律示。特に西大寺流的研究では、主に律
僧の宗教的側面が大いに解明されてきた一方、本寺西大寺に
いての研究の蓄積は、相対的に希薄な状況だろう。一方本寺西大寺
律家による寺内・寺辺の検断、およびその検断の変遷を検討し
かつ西大寺律家の領主としての側面を解明する事を試みた。外
西大寺律家は、鎌倉・南北朝期にかけて、別の僧侶集団である
所の白衣僧侶、および西大寺別当の検断権限を段階的に奪取する
形で、最終的に貞治六年（一二三七）に排他的な検断権限を確立
した。在し、これは律家によって制定された検断法には死刑が存
在しないが、これは律家に宗教南宋に基づくものと考えるべきで
あろう。また、同是律家によって制定された検断法には死刑が存
在しないが、これは律家に宗教南宋に基づくものと考えるべきで
あろう。また、同是律家によって制定された検断法には死刑が存
在しないが、これは律家に宗教南宋に基づくものと考えるべきで
あろう。また、同是律家によって制定された検断法には死刑が存
在しないが、これは律家に宗教南宋に基づくものと考えるべきで
ある。また中世大和国においては、以降はおそらく、中世在地社会全般
においても特筆刑罰観という事ができる。